

栄山寺とつづみの星のこと

川村優理

表紙絵 川村明日香



それは わしである



ちようちんやの吉之助と、質屋のまりちゃんは、吉野川沿いの町、唐橋通りに住んでいます。吉野の山々から流れ出た吉野川は、紀州の海をめざして流れ、唐橋通りは、その吉野川の流れに沿うように、長く続く街道です。

川を船で行き来する人たちが船を降りて立ち寄って行ったり、大坂から金剛山を越えて吉野へ行く人が宿に泊まったり、紀州から伊勢へ旅する人たちが通り抜けて行ったり・・・ざっと百軒の店が並んでいるので、近くの村々からの買い物客も集まりますから、通りはいつも、人で賑わっています。

吉之助の父ちゃんの「ちようちん屋」と、まりちゃんちの質屋「大坂屋」は、通りの真ん中にある赤い橋「唐橋」をはさんで、となり合っていました。

ふたりは、小さいころからの仲良しです。

朝は、唐橋通りの西方寺にある寺子屋で、読み書きとそろばんを習い、昼間は店を手伝い、弟や妹のめんどうをみて・・・いるはずなのですが、本日、店番をそつと抜け出してやってきたのは、川をさかのぼったところにある古いお寺、「栄山寺」でした。

「まりちゃん。やつと着いたね。川にそつて歩けばなんとかたどり着くだろうって。でも、ずいぶん遠かった。」

「ほんとだねえ。吉之助がさ、栄山寺には、もうすぐ消えて無くなりそうな古くてりっぱな絵があるらしいって言うから、それじゃあ今の間に見とかなきゃって・・・来てはみたけど、やつぱり遠いよ・・・で、その消えそうな絵っていうのは、はどこにあるの？」

「なんでも、八角形のお堂の柱と天井に、そりゃあ綺麗な絵があつて、それが（消えそう）なんだって。（消えそう）ってところがね、ちようちん屋には、なんか、たまんねえんだよな。」

「ふうん・・・」

そんな古い絵のどこがいいのか。まりちゃんにはさっぱりわかりませんでした。

（質屋は、消えそうな絵なんて、商売にゃないと思うけどな。）

吉之助は、ちようちん屋のせがれだけあつて、絵が得意です。ちようちんに絵を描いて、中に火を灯せば、絵はいつそうきれいに浮かびあがります。

それから、ちようちんの灯りを「ふつ」と消すと、絵も一瞬で消えてしまいます。吉之助は、ちようちんの灯りが大好きでした。

ですから、自分の絵を描いたちようちんを、いつか唐橋通りの店一軒一軒に吊るして、そこにいつせいに灯りを灯してみたいというのが、吉之助の夢です。

「百のちようちんに、おいらは全部違う絵を描きたいんだよね。ノコギリ屋にはノコギリの絵。そば屋にはそばの絵。たばこ屋にはタバコの絵。」

立派なちようちんやを目指している吉之助は、店番の手伝いをしながら、古いちようちんの絵を見本にして、絵の練習をします。

ちようちんの紙には折り目があるので、その上に、なんでも描けるようになるのは、とても難しいことですが、だるまさんでも大黒さんでも弁天さまでも、どんな絵でも描けるちようちん屋になりたいと、吉之助は思っていました。



そして、今日のこと——。

「いやあ、うまいもんだなあ。」

いつものように、手習いの紙に絵の練習をしている吉之助の手元をのぞきこんで、ひげづらの大きな男の人が言いました。

「そんなに絵がうまいんだから、本物を見ることも大事だぞ。このあたりには、そうだ、栄山寺の八角堂に行けば、きれいな天女さまの絵や、天の花の絵が見れる。栄山寺の絵は、そりゃあすばらしい。でもな、千年も前に描かれたもんだから、もう消えそうなんだ。早く行かないと、ほんとうに消えちゃうぞ。」

男の人は、紀州からきたお医者様だということでした。

「わしは、医者だが、痛みを忘れてしまう麻酔薬を作ろうとしている。この薬の材料には、天の花を使わねばならんと、古い書物にはある。」

「天の花？」

「そうさ。天の花。マンダラゲという植物のことと記されておるが、このマンダラゲはなかなか手に入る花ではない。」

「このへんでは、見ない花だね。」

「そうさ。それに、天の花とは呼ばれてはいるものの、恐ろしい、毒にもなる。わしは、痛みをとる薬を作ろうとはしているが、実験を繰り返しているうちに、毒を作ってしまうのではないかと恐ろしくなる。そんなときに、本物の天の花の絵を見ようと、栄山寺にやってくることにしているのだ。八角堂の絵こそが本物の天の花だよ。もしあの花を薬に使えたなら、ほんとうに、どんな病も直すことができるかもしれんがなあ。」

「本物の天の花か・・・」

吉之助も、その花を、見てみたいものだと思いました。

「おいらも、ちようちんに天の花を描いて、綺麗な灯りを灯したいな」

「そりゃあいいことだ。そんなちようちんができたなら、わしも、ぜひ、買わせてもらおう。」

また、絵を見にくるよと笑いながら、店を出ていく男の人の大きな背中が、少しさびしそうに見えました。

「ありがとさんでした。」

男の人を見送ってから、吉之助は、大急ぎで唐橋を渡り、まりちゃんちに駆けていきました。

「まりちゃん。今から、天の花、見に行こう。ほっといたら、消えちゃうつてよ。」

そして、栄山寺・・・

「吉之助、あった。あれだよ。」

八角堂の古い扉が、大きく開いています。

ふたりは、おじぎをして、そおつと中に入ってみました。

りっぱな木の柱に、小さな天人たちが、楽器を演奏している絵が描かれています。

横笛を吹く天人、たて笛を吹く天人、琵琶を弾く天人、小さい琴を弾く天人。

天人たちの柱が支える、天井には、何十という花が鮮やかな色で並んでいます。

「これが、天の花。」

吉野川から吹き込む風が、お堂を通りぬけていきます。

吉之助は、美しい花や天人の絵が、この風によってどこかに飛んで行ってしまわないのだろうかと思いました。



その時、柱のずいぶん高いところから、かすかに、鈴をふるような音がしました。

「おやおや。いつのまにか、すっかり明るくなっていった。」

吉之助とまりちゃんはおどろいて顔を上げました。

そこには、つづみを打つ小さい人がいました。

「次の風につて、空に帰らねばな。」

つづみをもった人は、すきとおる、水のあわのように丸くて、きらきら光っています。そばに、魚が一匹。空気の中を泳ぐように、ひらひらと浮かんでいきます。

小さい人は、魚に声をかけました。

「さかな。みんな心配しておろうな。」

吉之助は、そのつづみに見覚えがありました。

「どこかで見た気がする。こんな形。」

「そうか。知っておるか。わしは、すうという名である。すうさんと呼べ。じゃが、つづみは、おっと、なんとという名前であったかの。」

すうさんは、そばでひらひら泳いでいる魚を振り返ってたずねましたが、魚も、覚えてはいないようすでした。

「音は、こんな音じゃ。」

小さな人が軽く叩くと、つづみの音は

——カーン！——

と、甲高く、お堂の中に響きわたりました。

魚が、うれしそうに、ぴよんぴよんはねました。

カーン。カーン。カーン。

すうさんは、不思議な歌を歌い始めました。

馬並めて

うち群れ越え来

今日見つる

吉野の川を

いつかへり見る

〔『万葉集』巻九 1720 元仁〕

歌に合わせるように、天井の花に、やわらかい光がさしこみ、柱の天人たちのすがたが、くつきりと浮かび上がってきました。

桃色や赤や、水色の雲が空をゆっくり動き、天井の花がゆれています。

池に映る青空の景色のように、天井が輝いて、笛の楽人、びわの楽人たちの演奏が始まりました。



「絵に描かれた楽人たちは、みな、この歌が好きだろう。」

すうさんは、にっこりと笑いました。

「そうだ。思い出した。すうさんのつづみは、空の星の形とおんなじだね。」

「これはつづみ星。わしが、天からつづみ星をもってきたのは、吉野川の流れを見て、ここの楽人たちと音楽を楽しみたくなかったからじゃ。」



なんでもすうさんは、星の三兄弟の真ん中で、兄さんの星と弟の星と、三つの星で、このつづみの星を守っているのだそうです。

「つづみの星は、そうじゃ、遠い国では、オリオンなどと呼ばれておった。」

すうさんは、水玉のようにふうわりと浮かび上がり、風に吹かれるように、そのあたりを飛びました。

「いやはや、空から遊びに来たのであったが、この柱に乗っかって、いねむりをしているうちに、朝になっておった。さ。急いで帰らねばならん。兄と弟が探しておることだろう」

魚も、うんうんとうなずきました。

「では、帰るとするか。楽人たちよ、いっしょに音楽を奏でてくれて、ありがとう。」
楽人たちは、すました顔で、柱の絵の中に戻って行きました

「今夜、空を見上げるがよい。つづみと、わしと、兄と弟との星が見えることだろう。」

そう言うと、すうさんは、空につづみを高く投げ上げました。

つづみは、ぐうんと空に舞い上がり、ちようど、流れ星が空から降ってくるほどの速さで、どんどん空の高いところの上っていきます。

空の青さの中にすい込まれるようにつづみが見えなくなると、すうさんと魚は、空気の中にと溶けるように消えていきました。

「よべば、いつでも返事をしてやる。ただしお前たちの声が聞こえればじゃが。それから天の花のありかじゃが……」

すうさんの声はだんだん遠くなり、おしまいの方のことは、川の風の音にかきけられていきました。

——その夜。

唐橋の上で、吉之助とまりちゃんは星空を見上げました。

「あ、あったよ、あれだ。つづみの星だ。」

ここからたぶん、声は届かないだろうと思ったけれど、まりちゃんが、ためしに呼んでみると、

「すうさーん。」

つづみの星が、少し動きました。

カーン

甲高い音が、星の光と共に唐橋の上に届いてきます

天の花を探しているあのお医者さんに、この音を聞かせてやりたいものだと、吉之助は思いました。

それからしばらくして、紀州の国のなんとかという難しい名前のお医者様が、麻酔薬の実験に成功したという噂を、吉之助は、店にきたお客さんから聞いたのでした。

(おしまい)